

病草紙における絵画様式の再検討

山本 聡美（共立女子大学）

「病草紙」現存二十一場面に、絵画様式上の振幅があることは早くから指摘されており、先行研究においては描線による分類もなされている。加えて、「地獄草紙」や「餓鬼草紙」、そして「伴大納言絵巻」との画風の近さについてもしばしば論及され、これら諸作例を包括する後白河院政期絵巻研究の一角に、本作も位置付けられている。ただし、「病草紙」各場面に関する絵画様式の分析がこれまでに十分尽くされたとはいえず、再検討を加えつつ作品論を深化させていくことが大きな課題としてある。本発表では人物の面貌・手足・着衣など細部の描写に着眼し、作品調査と高精細画像を用いた分析を通じて、制作に関与した複数の絵師の特徴を明らかにする。

かつて発表者は、「病草紙」を經典に基づく教説絵巻と解釈し、詞書と絵における多様性が経文からの距離に起因するとの観点から、現存諸場面を「経文に準拠する第一群」、「経説からの飛躍が認められる第二群」、「説話との融合が顕著な第三群」の三群に分類した。これを踏まえて再検証すると、上記分類と各場面の絵画様式には一定の相関関係が浮かび上がってくる。

まず、「説話との融合が顕著な第三群」と分類した「二形」「肥満」「眼病治療」の三場面を分析し、それぞれ異なる絵師による制作と結論する。抑揚ある描線を用い、面貌や身体各部分を詳細に描き込む「二形」の絵師（A様式と仮称）、謹直な線を用い、形式化しているものの的確に表情や仕草を描出する「肥満」の絵師（B様式と仮称）、謹直で張りのある描線を用い、細密な面貌表現や情感豊かな手指の描写が特徴的な「眼病治療」の絵師（C様式と仮称）。

三者の中で「眼病治療」の絵師が最も熟練しているように見受けられるが、他の二者も決して見劣りするものではなく、つまりこの三場面は「病草紙」制作に関与した複数の絵師の中でも、特に画技が優れている三名が手掛けたものと考えられる。制作現場のありようについて、これ以上の推論を重ねることは困難だが、これら三場面は「病草紙」の詞書と絵における到達点を示す。そして、第一群・第二群の絵画様式は、基本的に、ここで分析したA・B・C様式のバリエーション（本人、あるいはその影響下にある別の絵師の関与）として理解することができる。

そこで次に「経説からの飛躍が認められる第二群」に含まれる諸場面について、A様式を示す「歯痛」、B様式を示す「鼻黒」など、先に分析したA・B・C様式を基準に分類を試みる。多くの場面を含む第二群であるが、基本的にこの三様式の範疇で捉えることができ、構図、登場人物の面貌や仕草がある程度類型化されることで、全体としての統一感がとれている。

最後に「経文に準拠する第一群」に分類した「霍乱」「尿を吐く男」を見ておく。前者には、下書きの線や描き直しの痕が散見され、病の男を単独で描く後者では構図の単純さが際立つ。両者の詞書には経文を直訳したような生硬さが看取されるが、ここで指摘した画面の特徴もそのような初発性の現れとして理解することができるのではないだろうか。

以上の分析を通じて、本発表では、この絵巻に「二形」「肥満」「眼病治療」を中核とする少なくとも三系統の絵画様式が併存していることを明らかにする。